

中部の

エネルギーを 築いた

人々

東邦電力の技術を支え、

松永四天皇に数えられた 宮川 竹馬

宮川竹馬は、東邦電力の技術部門を支え、専務取締役まで栄進した後、日本発送電筆頭理事、四国電力社長を務めた電力人である。宮川は、明治20年1月、高知県幡多郡入野村に、宮川円次郎の次男として生まれた。明治33年4月、県立第二中学中村分校に入り、同39年東京高等工業学校電気科へと進んだ。授業中ほとんどノートを取らないにもか



東京高等工業学校校舎

かわらず、試験の成績はよく、周りから不思議がられた。肋膜炎を患い、

1年遅れて明治43年6月に卒業、三宅順祐教授の推薦で、博多電灯(社長山口恒太郎、明治29年創設)に入社した。



宮川竹馬
(河野幸之助『現代人物史伝
宮川竹馬』昭和34年8月)

博多電灯・福博電気軌道・九州電灯鉄道

入社した宮川は、外線係兼試験係主任に配属された。現場を歩いて、電柱1本1本の状況を記憶し現場員を驚かせた。同社は、明治44年、福沢桃介が社長、松永安左工門が常務を務める福博電気軌道と合併して博多電灯軌道となり、さらに明治45年佐賀に本社を置く九州電気と合併し、九州電灯鉄道となった。伊丹弥太郎が社長、松永安左工門、田中徳次郎、山口恒太郎が常務取締役であった。

宮川は、外線係長兼試験係長、大正2年さらに住吉火力発電所長を兼務した。住吉火力は明治41年9月竣工(500kW)の新鋭火力で、その後3500kWまで増設していた。宮川は所長となって、石炭受入方法の改善、倉庫整理の断行、職場規律の改革など発電所の改革を進めた。大正2年10月、視察に訪れた田

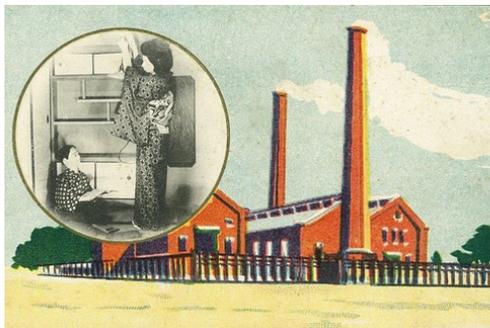


松永安左工門
(『中京名鑑』昭和3年11月、
『九電鉄二十六年史』大正12年12月)

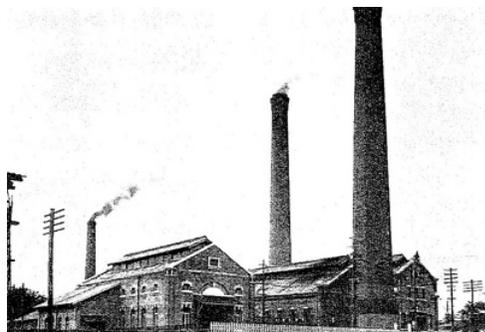


田中徳次郎
(『中京名鑑』昭和3年11月、
『九電鉄二十六年史』大正12年12月)

中常務は、宮川の仕事ぶりに感心し、以降何かにつけ宮川を引き立てた。大正6年に電気課長となり、大正10年には電気、土木、建築、機械の4課を統合した技術課長に就任した。当時の部下には、後に関西配電社長となる市川春吉、九州配電副社長となる西山信一、中部配電副社長となる鈴木鹿麿らの俊英がいた。



住吉火力発電所(伊藤勳『電力絵葉書館』)



住吉火力発電所(『九州地方電気事業史』平成19年)

東邦電力の技術部次長、査業部長、専務取締役

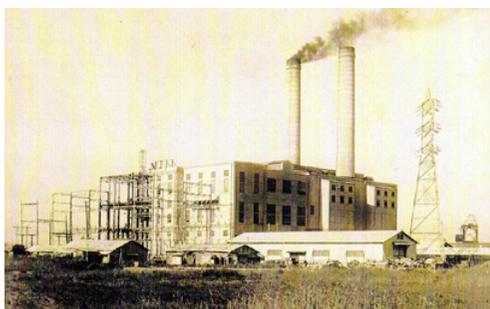
大正11年1月、九州電灯鉄道は、関西電気(名古屋電灯後身、社長福沢桃介)と合併、翌11年6月に東邦電力へと改称した。福沢桃介は名古屋市会と対立して辞任し、経営を朋友松永安左エ門に委ねたのであった。東邦電力は、九州電灯鉄道主体の会社となり、社長に伊丹弥太郎、副社長に松永安左エ門、専務に田中徳次郎が就き、宮川は理事技術部次長として東邦電力の技術を取り仕切った。

合併当初は停電が頻発し市民の不満が高

まっていたので、技術部次長としてその解消に取り組み、配電電圧2200Vを3500Vへと昇圧し、供給の安定をはかった。また、火力の充実を進言し、大正13年4月には名古屋火力建設所長を兼務した。当時、火力は水力の補給用とされていたが、宮川はピーク時への対応にも火力発電を使う「水火併用」を主張した。宮川は、強く反対した大同電力幹部のもとにも足を運び、ピーク時対応としての火力の意義を説明し解を取り付けた。この提案に基づき、当時としては画期的な名古屋火力(3万5000kW)が大正14年11月に完成した。

東邦電力は、関連会社東京電力を設立(大正15年5月)し、東京進出を目指した。宮川は15年8月、臨時東京建設部長として電力供給網の整備を進めた。東京市内の地中線工事(1万V)が東京電灯の妨害で進まなかったとき、宮川は対抗手段を講じてこの妨害を封じた。

昭和2年から営業・調査・技術を統括する



名古屋火力発電所



名古屋火力発電所 竣工式



越戸発電所(当時)(『中京名鑑』昭和11年9月)

